

## 芥川 記氏

元愛媛県染織試験場長・同試験場染色技術者

戦前から今治タオル工業の発展において中心的な役割を果たしてきた愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）で、染晒工程の技術者として40年間勤務。1985年から1991年にかけては場長を務め、タオル業界がバブル経済に沸く好況のさなかでも、惑わず従来の試験場の役目をまっとうし、その指揮をとってきた。「今治タオル工業の発展に染織試験場あり」の伝統は、こうして引き継がれていった。戦後復興期、高度成長期、安定成長期、バブル経済期と時代の変化によって染織試験場の立場は少しずつ変化してきたが、染織試験場が産地の人びとをつなぐ求心力であったことに変わりはない。染織試験場での染晒工程一筋の半世紀を芥川氏に語っていただく。

---

あくたがわ・しるし ☆ 1932年、東京都王子区（現在、北区）生まれ。6男3女の末っ子。戦争の影響で父親の故郷である愛媛県西条市に疎開し、西条中学校へ転入。西条北高校卒業後、愛媛県染織試験場内に設置されていた今治高等職業訓練校で染色の勉強をしたのち、染織試験場の染晒専門の技術者として入所。1985年から1991年まで同試験場の場長に就任し、組織の舵をとった。




芥川記氏



## 1. 「タオル人生」の第一歩

### 戦争の影響で東京から父親の故郷・西条へ移住

芥川記氏は、1932年3月、東京の王子区（現・北区）に6男3女の末っ子として生まれた。父親の準一郎氏は、師範学校卒業後、東京都内の小学校の教員をしており、その関係で幼少時代を東京で過ごした。しかし戦中の1941年、芥川氏が王子第二小学校に通っていたとき、父親の故郷である愛媛県西条市福成寺に移住した。西条市に戻ったのは戦況悪化による強制疎開のためだったが、もうひとつ重要な理由があった。父親とおなじ西条市出身で立憲政友会の政治家として名を馳せた河上哲太  氏の推挙で、準一郎氏が西条市の子安中学校（現・小松高等学校）の校長として着任することが決まったからである。その後、新設計画のあった河北中学校の創設に係わり、同校の校長を歴任した。河北中学校には現在も準一郎氏の銅像が建っている。



芥川準一郎氏の銅像



佐山繁行『河上哲太翁伝』新紀元社、1964年（今治市立図書館所蔵）。

芥川氏は、家族とともに西条市へ引っ越ししたため、西条中学校に1年生の2学期から転入し、西条北高等学校（現・西条高等学校の50期生）を卒業したのち、愛媛県染織試験場内に設置されていた今治高等職業訓練校の染織科に入学した。これが、芥川氏のタオル人生の第一歩となった。

ただ、芥川氏は、元々織物に興味がありタオル好きが高じて訓練校へ入学したわけでない。就職難の時代だったこともあり、「偶然の成り行きだった」と芥川氏は言うが、幼少の頃からモノづくりに興味があり、小学校のときには自分で天体望遠鏡をつくるほどだった。また、就職難とは言え、「なんかせんといかん」という焦りと、西条が今治と隣接していたことも、芥川氏がタオル業界に入るきっかけを用意した。

こうして芥川氏のタオル人生はスタートを切ったわけだが、学生時代を振り返ってひとつだけ心残りがある。それは、生涯で修学旅行の経験がないことである。戦争という時代の不運がそうさせたのであるが、タオル業界に芥川氏の足を向かわせたのも時代の運だったかもしれない。

自宅のあった西条から訓練校のある今治まで、2年間、日曜日を除いてほぼ毎日車で40分かけて通い、タオルの染晒に関する専門知識と製織に関する基礎知識を修得した。そして、1953年の21歳のときに染織科課程を修了し、運良く、そのまま染織試験場の染色技師として採用が決まった。着任後に初めてもらった月給は、忘れもしない3,500円だった。当時の私設工場労働者の平均が1万円くらいだったので、県職員の給料はけっして割のいいものではなかったが、初めて自分で稼いだお金の重みはひとしお一入だった。

幼少時代からモノづくりが大好きだった少年が時代に翻弄されながらもタオルと出会い、タオルの染色技術を修得した青年はのちに今治のタオル工業の発展を支える人物のひとりに成長していく。

（次号につづく）

